

## 食の多面的機能

茨城大学農学部 教授 立川 雅司

農業の多面的機能が議論されて久しいが、食にも多面的機能があるのではないかと最近考えている。このことを考えるきっかけになったのは、2015年と2016年に実施したトロントでの調査である。トロントでは、フードポリシー・カウンシル<sup>(註)</sup>という組織が、食に関わる様々な問題解決（肥満やフードデザートなど）に取り組んでいる。とくに力を入れている活動のひとつに都市農業の振興がある。屋上菜園や学校菜園、コミュニティガーデンなどで人々が農業を行い、収穫物を分け合い、調理し、共食することで、コミュニティのつながりが再構築されていると評価されている。トロントのような大都市では、様々な民族が互いに近接して暮らしているが、食を通じて、出会い、互いの文化や習慣に触れる機会が生まれたのである。こうした活動により、感情的なわだかまりを緩和したり、地域の犯罪率の低下などにも一役買っているようだ。ジョンズ・ホプキンス大学の研究によれば、北米では、都市における食料をめぐる様々な問題に取り組む組織として、フードポリシー・カウンシルが多数設立されてきているとのことだ。その背景には、都市問題の緩和や肥満の改善に、食や農が貢献しうることが広く認識されつつあるためと考えられる。

そもそも食に無縁な人々がないことは、まちづくりのツールとしても食が大きな可能性をもつことを意味する。じっさい、トロントのフードポリシー・カウンシルの初期に関わったWayne Roberts氏は『Food for City Building』という著作を公表しているように、食を切り口としたまちづくりがトロントでは取り組まれている。食をツールとした活動には、まちづくり以外にも、教育、福祉、観光、雇用創出などの期待も寄せられている。食はまさに多面的機能をもつといえる。

このように食とまちづくりが接近してきたことによって、都市計画の分野からも積極的なアプローチがなされるようになってきた。都市のなかでどのように食や農を配置していくのか、その際にどのような観点（環境、健康、地域活性化など）を盛り込むべきかなどが議論されていく。都市計画と食は、こ

れまでほとんど関連付けで考えられてこなかったが、こうした状況が変化しつつある。このことは、公共的な観点を食や農にも導入することを意味する。従来のフードシステムは、基本的に民間事業者が経済的利益獲得を至上目的とした〈私〉の領域と考えられてきた。

フードシステムに関する研究も、サプライチェーンの最適化や効率化、産業組織論や消費者行動の研究などにウエイトが置かれてきたが、このこともこうした〈私〉の領域において派生する事象を分析対象とするという前提があったためと考えられる。

しかし、食が多面的機能をもつのであれば、フードシステムを公益性や公共性という観点からも評価する必要があるのではないだろうか。例えば、地域振興やコミュニティ形成、格差解消、健康増進、持続性などの公益性の観点からフードシステムを再評価するという視点が必要となろう。究極的にはどのような食料供給のあり方が社会にとって望ましいのか、多角的な価値観から評価し、実現に向けて事業者と行政、市民が協働するということが必要であろう。トロントではまさにこうした取り組みが行われてきたと言える。

食は、社会そのものにも栄養を与え、社会を構成する人々の関係を調節する機能があるのではないかと。食を多面的機能という観点から再評価し、食をツールとした様々な働きかけを通じて、よりよい地域社会の創出ができるのではないだろうか。

註. フードポリシー・カウンシルの北米での展開に関しては、下記を参照のこと。

Harper et al.著（加藤・立川共訳）、「フードポリシー・カウンシル：その経験からの示唆」、『のびゆく農業』1014号、2014年

